
東方詠夜伝 - a long night of another story -

作者月詠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方詠夜伝 - a long night of anather
r story -

【Nコード】

N6587K

【作者名】

作者月詠

【あらすじ】

月を眺めるのが好きな少年が幻想入り。

果たして、月を映す漆黒の瞳は幻想の果てで何を見る？

さあ、何もかもを受け入れる残酷な楽園である幻想郷で繰り広げられる物語の…始まり始まり……。

第零話 【幻想】

「それはある日の出来事…」

——なあ、”東方”って知ってるか？

”東方”？

なんだそれは…。

何処ぞの韓流歌手グループか？

「それは日常の終わりであると同時に、」

——確かにそっちも東方だけだよ…（汗

では何だ。

超常の始まり…」

——明日、俺ン家に来いよ！たゝっぷり&ゆっくり説明してやるぞ
E！

……明日バイトなのだが…（汗

「幾億もの可能性の果てに存在した現実…」

——だが断る！

……嗚呼、頼みがある。

「常人に語れば戯言と片付けられる現実…」

——お？何だ何だ？……って待て、何故拳を掲げてイルノデスカ？
（滝汗

三途の川、様子見て来い。
大丈夫だ。恐らく片道だ（はあと

「他に語れば夢だ妄想だと罵られる現実…」

——ちょwwwそれって死n…”ゴスッ”アッー！

…馬鹿も片付いた。

夜まで時間もあるし、昼寝と洒落込もうか…

「真実の月は幻想を照らし、現す」

今日は満月だったな…
楽しみだ。

「東方詠夜伝 - a long night of anath
er story - …始まります」

第巻話 【月と幻想】

―自宅「夜」―

徐々に目が覚めていく。

窓の外を見れば既に夜の暗闇だった。

遠くに見える少数の街の街灯。

時計を見れば夜中の二時…俗に言う丑三つ時だ。

丑三つ時は妖怪や人外の者が徘徊するという古くからの謂れだが、俺はそうは思わない。

何故なら月が一番、他の光に邪魔されずに輝ける時間だからだ。

そして今日も日課の如く屋根に昇り、寝転んで夜空に輝く満月を眺める。

「アンタも良いと思わないか？お姉さん」

俺がそう言っていると寝転んでいる俺の隣の空間に切れ目が入り、中から金髪の女性が現れる。

女性「気付いてたのね」

「気配には敏感な性質タチでね…それにアンタは普通の人間とは違う気配オイがするしな」女性でここまで妖しい気配ニオイすんのはそうそう居ない。女性「あら、私が問答無用で人を食べるような怖い化け物だったらどうするの?」

女性が問う。

「だったら今ここに居る俺は何だい?喰われて未練たらたらな哀れな亡霊か?」

女性「……ぷっ…アッハハハハハハ!」

「ククク…ハハハハハハハハ!」

静かな夜空に響く笑い声。

五年間一人暮らしをしていた俺にとって、とても楽しい一時ヒトツキだった。

「ここまで笑ったのは久しぶりだ。礼を言うよ」

女性「あら、礼を言われる様な事はしてないわよ?」

「良いんだ。俺の自己満足だからな…ありがとう」

女性「そう、自己満足なら仕方ないわね」

「俺は【――】っていうんだ。アンタ、名前は？」

ここまで俺を楽しませてくれた恩人だ…名前ぐらいは知っておきたい。
イイヒト

女性「紫…八雲ヤクモ ユカリ 紫。とある楽園の賢者よ」

八雲紫か…おしつ、記憶した！
しかしここで疑問が一つ…。

「楽園…？」

紫「何もかもを受け入れる忘れられた者の行き着く先にある楽園…
ゲンソウキョウ
名を幻想郷」

幻想郷……。

「一ついいか？」

紫「何かしら？」

「その月は綺麗か？」

紫「ええ…それはとても……ね」

なら言っ事は一つだけだ。

「紫、俺を……」

幻想郷に連れてってくれ」

それを聴いた紫は驚きもせず、寧ろ妖しく笑う。

紫「良いのね？後戻りは出来ないわよ？」

「月が綺麗な場所に行くんだ。後悔の『こ』の字もない」

紫はクスリと笑うと俺にこう言った。

紫「幻想郷は貴方を歓迎するわ。ようこそ、忘れられし者の楽園へ
……」

その言葉を最後に俺の意識は消えていった……。

「第壱話【月と幻想】、完結」

意識が回復した彼が最初に見たものは森。

しかし彼は『月を眺める事が好き』という記憶以外を失くしてしまう。

そこへ現れる謎の少女の正体とは？

次回、「東方詠夜伝 - a long night of another story -」。

第貳話、【人喰いと医者紛いと黒白と】

さあ！次回までの時を数えろ！

第貳話 【人喰いと医者紛いと黒白と】

―???

何処とも知れぬ森の中。

一つの木に座り込む一人の少年が居た。
正確には静かに寝息をたてて寝ていた。

「…つく…?」

突然、少年が目を覚ます。

月明かりに漆黒の髪が輝き、風に靡^{ナヒ}く。

「ここは…?何処だ?」

無表情で一人疑問符を浮かべる。

「まあ、いいか…月が綺麗だし」

少年はかなりズレているようだ。

すると茂みの影から金髪のボブショートに赤いリボン、黒いワンピースの少女が現れる。

少女「わは？」

「ん？」

少女と少年の目が合う。

沈黙・・・

「…月が綺麗だな」

少女「そーなのかー」

はたして、この二人に何か通じるものがあつたのだろうか…仲良く切り株に座り、静かに月を眺めている。

「お前、月は好きか？」

少女「ふえ？　んゝ……好きだよ？綺麗だし、まん丸だし、おいしそう！」

「ははっ！おいしそうか！　…食うか？」

少年がポケットから取り出したのは『お徳用！』と書かれた包装紙に包まれた直径15cmのペロペロキャンディーだった。

少女「わー！良いの！？」

「月が好きなヤツに悪いヤツはいない…そう思ったからな。　どうせ俺食わないから」

少女「いったただっきまーす！」

少女はおいしそうにキャンディーを食している。

その間にも少年は月を眺めている。

少女「（じゝゝ…）」

「…どうした？」

少女はキャンディーを咥えながら少年を見上げている。

少女「…そんなにお月様が好きなの？」

「…かもな。

それだけは覚えていた。『月を眺めるのが好き』って…な。
他はわからない……自分の名前さえ、何者かもな」

少女「…ごめん」

「なんで謝る？正直一人だと寂しかったから嬉しかったんだ。
寧ろこちらから礼を言わせてくれ……ありがとう」

少女の俯いた頭に手を沿え、少年は礼を言う。

少女「えつとね…私は【ルーミア】って言うの。

あとね、名前を教え合ったら友達だって私の友達が言ってたの！」

「でも…ごめんな？俺名前解んなくて………」

すると少女…ルーミアは首を横に振り、否定する。

ルーミア「名前の代わりにお菓子くれたもん！だから、私達はもう友達だよ！」

「そっか…ありがとうな？ルーミア」

少年はそう言ってルーミアの頭を撫でる。

ルーミア「えへへ…／／／」

その時、少年の顔が強張る。^{コッパ}

ルーミア「どうしたの？」

「逃げるルーミア…ヤバいのが来る…！」

少年の見ていた方向から唸り声を上げて、のそのそと近付いて来る狼。

しかし普通の狼に非ず、それは巨軀。

優に前兆10mはある。

丸腰の少年少女では、まず敵わ^{カチ}ない相手だ。

「せつかくの友達を失ってたまるか…！」

そう言った少年は無茶苦茶な格闘の構えを執る。

「ガアアアア!!」

巨狼はその鋭い爪で少年を貫こうとする。

だが……

「ガシッ」

巨狼の爪を止めたのは少年でもなく、周囲の木に刺さった訳でもなく……

ルーミア「それはこっちの台詞セリフだよ。新しい友達見捨てるなんて出来ないもん!」

ルーミアだった。

「え!？」

ルーミア「黙っててゴメンね? 実は私妖怪なの。それも簡単に人を食う妖怪…でもね、人と同じ…心はある! お兄ちゃん! 私のリボンを取って!!」

ルーミアの言うリボンとは頭にあるお札によく似た赤いリボンの事だろう。

少年は頷き、ルーミアのリボンを解く…

するとルーミアが黒い光に包まれる。

黒い光が治まるとそこに立っていたのは…

金色の長髪を靡かせ、紅く鋭い眼光が輝く。
空いていた手にはくすんだ光を放つ大剣が現れる。
それと同時に漆黒の羽根が舞う。

俗に言う【EXモード】である。

ルーミア（EX「お兄さん、すまないな…感謝するよ。
さあ、体も本調子に戻った。私の友人を襲ったこと自らを呪う
がいい！！」

” 闇符『デイマーケイション』”

ルーミアの周囲から色取り取りの球体が現れ、巨狼に次々と撃ち込
んでいく。

そんな時、少年に変化が起きていた。

（こんな時に俺は無力なのか！？友達が…ルーミアが戦ってるのに
！！）

「汝、^{ナンジ}力を欲するか…^{ホッ}」

少年の頭に話しかけてくる謎の声…

（誰だ！）

「汝、何故力を欲する？」

（…？ 答えて欲しいなら答えてやる！

『友を助ける為！』それで文句ないか！？）

「自らでは無く、他の為か…面白い。ならば紡げ！唱えよ！汝の咆^コ哮^コを！汝の共鳴^{サケビ}を！！」

謎の声にそう言われた少年は、目を閉じ、囁く様に言霊^{コトダマ}を紡ぐ。

仏に逢うては仏を斬る

「鬼に逢うては鬼を斬り・・・・・」

剣^{ツルギ}冑^{コトワリ}の理、ここに在り!!」

少年の背後の地面から禍々しい^{ヨロイカブト}鎧兜が現れる。

鎧兜が少年を包み込む様を開く。

——EXルーミアside

「おおおおお!!」

私は完全解放した六尾の巨狼を相手に戦っている。

こちらも開放したとはいえ、護衛しながらの戦闘は骨が折れる…

「闇剣『ドゥームブリンガー』」！！切り裂け！！！」

私のドゥームブリンガーで爪と牙相手に善戦するも徐々に押されてきている…

（マズイ！このままではあの人^{オニイサン}に！）

巨狼の右爪が私から反れ、後ろへ向かう。

「ザンツー！！」

終わった…何もかも…

そう思ったとき、声は聞こえた！

？「助けに来たぜ。ルーミア」

禍々しい鎧を身に纏った人物の、かすかに見えるその瞳は完全にあ
ニイサン
の人だった！

——N O s i d e

「ガアアアアアアアアッ！！」

巨狼は怒り狂った様に暴れまわる。

「レールガン電磁抜刀、シヨウ昇！！」

少年の持っていた刀が電気を帯び、凄まじい勢いで斬り上げる。

ルーミア（EX）「はあっ！」

斬り上げられ、宙に舞う巨狼の所までルーミアは飛び上がって回転斬りを行う。

「ルーミア！征くぞおお！」

ルーミア（EX）「承知！！！」

二人は巨狼の上空まで飛び、刀と大剣を上段に構え…

「オウリヲハジメル
終焉執行……」

「電磁抜刀、禍……！」

ルーミア（EX）「闇閃『ダークスライサー』……！！！」

一気に振り下ろした！

「斬ッッ!！」

十字に斬られた六尾の巨狼は黒い雷と闇に包まれて消えていった。

「シュウウ…」

鏡が砕ける様に鎧兜は霧散し、普段の少年に戻る。

だが…

「ドサッ…」

ルーミア（EX）「お兄さん？お兄さん!？」

ルーミアは抱き寄せ、少年を揺するも反応は無い。

医者にも診せたいが自分では間に合わない。

しかしルーミアは自分の現在位置を思い出す。

ルーミア（EX）（ここは魔法の森…ここならアイツが！）

ルーミアは少年をお姫様抱っこで飛翔する。

幻想郷で二番目に速い者の元へ……

魔法の森。

ここには三人の人物が住み着いている。

片や魔法使い兼人形師。

片や半妖の道具屋。

そして…

幻想郷”準”最速の黒魔法使い。

ルーミア（EX）「着いた…！」

ルーミアの着いた先は少し蔦^{ツタ}が巻き付いている一軒の家。
家の前にある看板には『霧雨^{キリサメマホウグテン}魔法具店』と書かれている。

ルーミアは大きめに扉をノックする。

ルーミア（EX）「魔理沙！開けてくれ！話がある…！」

？「全く…何なんだぜ？こんな夜中に…」

中から黒地に黄色の星の柄のパジャマを着た金髪ウェーブの少女が
出てくる。

この少女が別名『普通の黒魔法使い』である【霧雨^{キリサメ}魔理沙^{マリサ}】だ。

魔理沙「はいはい、どなただ？…ルーミア！？お前また封印を…」
ルーミア（EX）「御託はいい！！コイツを薬師の所へ…永遠亭^{エイエンテイ}へ最
大速度で運んでくれ…！！」

魔理沙はルーミアの腕で意識の無い少年を見て目の色を変える。

魔理沙「…そういう事だったら御安い御用だ。任せな…お前は後からゆっくり来い」

ルーミア（EX）「あ、ああ……………」

そう言つて魔理沙は少年を背負い、箒に乗つて風のように飛び去つた…

ルーミア（EX）（ひとまずはこれで安心か…言われた通りゆっくりと向かうでしょう……）

そしてルーミアは漆黒の翼を広げ、目的地である永遠亭へと向かった。

永遠亭。

ここは、幻想郷唯一の医療機関であり、外の世界の様な医療機械は

無いものの。

大抵の病、怪我などは薬師【八意 永琳^{ヤコロ エイリン}】の能力、『ありとあらゆる薬を作る程度の能力』と天才と謳われたその頭脳により解決する。

魔理沙「永琳！起きてるか！？」

そこへ少年を背負った魔理沙が飛び込んでくる。

永琳「状況は自己判断させてもらったわ。その子をこの寝台に乗せて」

受け答えたのは銀髪で大きく一束の三つ編みに紺と赤の交互のナース服の様なものを身に纏った女性、【八意永琳】である

永琳「……これは……！」

寝台に寝転がる少年を診察中に異変に気付く永琳。

永琳（事態は思ったより深刻…手術は必須ね…）

はたして、それは運命なのだろうか…はたまた必然たる宿命なのか…

その先は、誰も知らない…。

「第弐話 【人喰いと医者紛いと黒白と】 …… 完結！」

第弐話 【人喰いと医者紛いと黒白と】（後書き）

少年は生身の四肢の代わりに、能力と機械の四肢を手に入れる。

そして新た名をその身に刻む。

そして少年の前に自らを『魔人』と名乗る男が現れる。

次回、「東方詠夜伝 - a long night of another story -」。

第参話 【機械と魔人】

さあ！次回までの時を数えろ！！

闇剣『ドゥームブリンガー』

ルミアが闇を物質化した両刃の大剣。
リボンの封印をしたままだと短剣になる。

闇閃『ダークスライサー』

ドゥームブリンガーに闇を纏わせて切れ味を上げるスペルカード。
闇の刃を飛ばす事も可能。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6587k/>

東方詠夜伝 - a long night of another story -

2010年10月8日13時26分発行